

やっと学校に明かりが灯(とも)りました

9月6日(日)の早朝、学校周辺が停電になりました。日曜日でしたが、連絡を受け何人かの職員が学校に駆けつけました。周辺地域は早めに回復しましたが、学校は校地内の高圧電気を送るケーブルにトラブルがあり月曜日も停電のままでした。普通、停電で困るのは電気、と考えますが、実は水の確保も問題です。本校の飲み水は地下水を利用しているため、夏冷たく冬暖かく嬉しいことですが、ポンプ(電気)で汲み上げているため停電になると、電気ばかりか水も使えません。そこで学級の連絡網で飲み水の持参をお願いしました。ただ、幸いなことに本校には水の出る蛇口が3カ所ありました。甲府市の上水道と連結している蛇口からは停電でも水は出ました。これは高所に設置された配水池から高低差を利用し給水するというシステムになっているからです。本校では管理棟(南館)にある職員室と隣の会議室の計3つの蛇口からは水が出ました。

朝、この蛇口から、バケツに水を汲みトイレ用、手洗い用の水を用意しました。中館や北館に職員と子ども達で力を合わせて水を運びます。でも、2階、3階に運ぶのは大変なことです。職員だけでなく高学年児童も大いに頑張りました。ただ、バケツの数も限られており、休み時間になり、こども達がトイレや手洗いで使うと直ぐにバケツは空になります。そこで、何度も運ぶことになります。市の水道局にもお願いしました。給水車が水を運んで来てくれました。市の職員が自ら2階、3階に水を運んでくれました。

そして、12時も過ぎた頃、やっと発電機が届き設置されました。一台は、井戸水のポンプアップに使います。これで水の心配はなくなりました。もう一台は、職員室の電気需要をまかなうために使われました。電話が繋がるようになりました。「良かった。これで明日からは、普通の生活に戻れる。」と誰もが思いました。

所が、工事は難工事になりました。漏電のあった電気ケーブルの交換をするのですが、32年も前の開校時に設置したものです。新しいケーブルと取り替えようとしても、電気ケーブルを抜くことが出来ません。長い年月の間にケーブルを保護する筒状のカバーが変形し、ケーブルとの間に隙間がなくなっていたのです。そこで、掘り起こして新しい回路をつくることになりました。工事は思いもよらぬ大がかりなものになりました。火曜日も、結局、電気は使えません。先生達が仕事をするにしてもパソコンも印刷機も使えない状況です。

これでは仕事にならないということで、発電機からの電気を引き、コピー機を使えるようにしました。印刷機も使えるようにしました。しかし、発電機の電気には限りがあり照明までにはまわりません。午後6時近くなると、職員室は薄暗くなります。とても仕事にはなりません。

3日目の水曜日午後4時頃でした。遂に復旧しました。その瞬間、職員室がパッと明るくなりました。職員から思わず拍手が沸き起こりました。ほぼ3日間、電気が使えない苦しい生活から開放されました。電気のありがたさを思い知った3日間でした。



重機による掘り起こし



いじめの苦痛から逃れたかったのか

9月7日(月)の山日新聞に、静岡県藤枝市の女子中学生が自殺した記事が詳しく報じられていました。お読みになった方も多いかと思いますが、紹介します。

(原文のまま)「いじめの苦痛から解放されたかったのだろう…」新学期直前の先月30日、静岡県藤枝市のショッピングモール駐車場で市立広幡中学2年の幼なじみの女子生徒2人(13歳)が自殺した。中学側は2人に対していじめがあったことを認めましたが、「改善したと認識していた。」

遺書を残していた生徒の70代の祖父は、告別式後に共同通信の取材に「予兆を見抜けず、助けてやれなかった」と声を詰まらせた。

「生きているのに疲れた。」生徒の自宅には2月の日付が記された1枚の遺書の外、携帯電話には、「上履きに画鋲が入っていた。」「先生はいじめに気づかないふりをしている」などと書いたメールが残っていた。

中学校側は31日の記者会見で、1年生時に2人へのいじめがあり、いじめた複数の生徒を指導したことを明らかにした。遺書の見つかった生徒の担任は「今年6月に『過ごしやすくなった』と言っていたのでいじめはなくなったと思っていた」とし、「明るくて活発な子だった」と話していた。

祖父によると、いじめが始まったのは小学4年生の頃、「一番ひどかった小6の時には、一緒に買い物に行っても目がうつろ、呼びかけても返事が遅かった」という。中学入学後も生徒は「悪口を言われている」と担任に相談していた。「それでもあの子は学校を休まなかった」と祖父は唇をかみしめた。

もう1人の生徒は、楽しい思い出を振り返るはずの小学校の卒業文集に「いつも悪口を言われてつらかった」と書き残していた。「ひそひそ話や舌打ちをされた」とも、小学校や中学校の話では、体が弱く学校を休みがちで、中学入学以降はあまり登校していなかったという。(以下略)

このような記事を目にすると、若者のあまりにも早い死になんともやりきれない思いになります。このような悲しい事件を未然に防ぐにはどうしたらよいのでしょうか。言い古された話になりますが、次のようなことを心に刻み生きることだと思います。

(1)自分の命を大切にすることを心を持つ。

この世には病気などで生きてくても生きられない人もいます。そのような人から見たら、自らの命を自ら閉じる、という行為はなんとももったいないことです。また、素晴らしい才能を持ちながら不治の病で亡くなった若者のことも新聞やテレビで見聞きます。どんなに辛くとも、生きていれば、きっと良いことがあります。そういえば、「辛(つら)い」と「幸(しあ)わ(せ)」の字が似ていることにも、何か深い意味を感じます。

(2)自殺することでいじめた相手に復習できる、という幻想を持たない。

私が死ぬば(自殺すれば)相手は自責の念にかられ、申し訳ないことをしたと深く反省する、に違いない。そんな幻想を抱かないことです。いじめをするような卑怯な奴は、自分がいじめた相手が死んだからといって、反省する気持など起きません。もし、そのような気持があるならば、「いじめ」などという卑劣な行為はしないからです。

(3)親として子どもの状況に目を配り、大切な存在だ、と伝える。

自殺する子は、必ずそのサインを周囲に送っているそうです。人は誰も心の中では「生きたい」と思っています。「救ってもらいたい」と思っています。そのサインを見逃さず、「危ないな」と感じたら、親として「私は、あなたのことを大切に思っている。あなたはかけがえのない存在だ。」と親の気持を伝えることです。